

国立国語研究所学術情報リポジトリ

表紙,目次,奥付,その他

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2103

日本語科学

Japanese Linguistics

12

2002年10月

October, 2002

国立国語研究所

The National Institute for Japanese Language
Tokyo, Japan

日本語科学 12

Japanese Linguistics 12

国立国語研究所

The National Institute for Japanese Language

2002年10月

October, 2002

「引く」ということ	安永 尚志	3
研究論文 Articles		
「する」と「やる」—非動作性名詞がヲ格に立つ場合— The functions of 'suru' and 'yaru' in combination with non-verbal nouns with case marker 'wo'	大塚 望 OTSUKA Nozomi	7
比較構文に出現する程度副詞—スケールの相違という観点から— The functional characteristics of adverbs of degree in comparative sentences: Using differences in scale to examine the degree of differences between two objects	川端 元子 KAWABATA Motoko	29
副詞の共起形式に関する史的変遷—推量のモダリティ副詞を中心に— Changes in the relationship between inferential modal adverbs and co-occurrence forms in Modern Japanese	小池 康 KOIKE Yasushi	48
多重主格構文の派生と解釈 Derivation and interpretation of the multiple nominative construction	中村 裕昭 NAKAMURA Hiroaki	72

明治期における近代哲学用語の成立—哲学辞典類による検証—

The formation of modern philosophical terminology in the Meiji era:
Research on philosophy dictionaries

朱 京偉 ZHU Jingwei 96

付属語「きり」の用法の変遷について—江戸語・東京語を中心に—

Changes in the usage of Japanese grammatical word *KIRI*:
The formation process of grammatical *KIRI* in the language of modern Tokyo

渡邊 ゆかり WATANABE Yukari 128

非意図的であることを表す副詞（的機能を持つ表現）の意味分析

—うっかり(と), うかうか(と), うかつに, うかつ—

A semantic analysis of adverbs and adverbial expressions of unintentionality:
“*Ukkari(to)*,” “*Ukauka(to)*,” “*Ukatsuni*,” and “*Ukatsunimo*”

李 澤熊 LEE Tack ung 153

世界の言語研究所 (12) マックス・プランク心理言語学研究所

喜多 壮太郎 169

平成14年度国立国語研究所公開研究発表会ご案内
第10回国立国語研究所国際シンポジウム報告

既刊内容 (第9号~11号)

投稿規定・執筆要領

国際シンポジウム開催のお知らせ／査読者一覧 (9号~12号)

編集後記

平成14年度 国立国語研究所公開研究発表会 ご案内

表現法の地理的多様性—方言地図で見る表現法の世界—

日時 平成14年12月20日(金) 午後1時30分～午後5時

場所 国立国語研究所講堂 公開(入場無料, 参加申し込み不要)

日本語研究において方言の文法が注目されています。文法の研究は、盛んに行われてきましたが、特にここ数年、方言を対象とした研究が増えてきました。共通語だけでは見えてこない枠組みや語形が方言には存在し、それらの性質や成立過程を追うことで、文法の本質に接近できると考えられるからです。

国立国語研究所では、方言の文法に関する全国資料として、『方言文法全国地図』の編集・刊行を行っています。文法事象を地図にすることで分布のありかたが視覚的にとらえられ、そこから多大な研究情報を得ることができます。

『方言文法全国地図』の第4・5集は、「表現法編」として編集されています。今回の研究発表会では、これら「表現法編」で扱った項目を中心に分布の提示と解釈・分析を行います。

表現法と言われる分野にどのような地理的分布が見られるのか、それぞれにどのような方法でアプローチすればよいのか、従来通りの方法が適用できるのか、適用できないとしたら、どのような方向が新たに期待されるのか、といったことを具体的に地図を提示しながら分析します。

【プログラム】

1. 大西拓一郎 『方言文法全国地図』と表現法
2. 小西いずみ 不定・疑問を表す助辞の分布
3. 吉田雅子 推量表現の分布と地方誌情報の連結
4. 三井はるみ 命令表現の分布と場面差
5. 大西拓一郎 方言表現法の分布類型と分布形成

問い合わせ先 国立国語研究所研究開発部門第一領域 田中牧郎

電話 03-5993-7635

FAX 03-3906-3530

電子メール mtanaka@kokken.go.jp

既刊内容（第9号～第11号）

【第9号】（2001年4月）

- 厳しさの底にあるもの 野地 潤家
特集：電子化資料による日本語研究
サ変動詞の活用のゆれについて—電子資料に基づく分析— 田野村 忠温
新聞漢字調査の現状と将来 横山 詔一・笹原 宏之・エリック・ロング・谷本 玲大
「日本語話し言葉コーパス」における書き起こしの方法とその基準について
小磯 花絵・土屋 菜穂子・間淵 洋子・斉藤 美紀・籠宮 隆之・菊池 英明・前川 喜久雄
いわゆる詠嘆・含蓄の「も」について 島山 真一
高知県方言ラ（一）の暗示性と明示性 上野 智子
九州における活用型統合の模様とその経緯—『方言文法全国地図』九州地域の解釈— 彦坂 佳宣
高校国語教科書における外来語の使用状況 橋本 和佳
被調査者の属性による偏りを持たない項目
—『国語に関する世論調査』（H7年度調査～H10年度調査）から— 田中 ゆかり
世界の言語研究所（9）アイオワ大学（FLARE プログラム） 西郡 仁朗

【第10号】（2001年10月）

- 文化と言語資源 田中 穂積
空間移動を表す動詞の分析—構文特性・アスペクト特性・タクシス特性に基づいて—
岡田 幸彦
接続助詞の語彙的な意味と文脈的な意味—クセニとノニの記述と分析を巡って— 渡部 学
京都市方言・女性話者の「ハル敬語」—自然談話資料を用いた事例研究— 辻 加代子
『哲学字彙』再版と三版の増補訳語について 朱 京偉
『厚生白書』のカタカナ語 中山 恵利子
世界の言語研究所（10）コレヒオ・デ・メヒコ 上田 博人
国立国語研究所国際シンポジウムご案内

【第11号】（2002年4月）

- コミュニケーション能力とは何か 鳥飼 玖美子
Face Threatening Act を明示するメタ言語表現について
—討論形態の談話の分析から— 加藤 陽子
日本語と韓国語における呼称選択の適切性 林 炫情・玉岡 賀津雄・深見 兼孝
「連語論」＜「移動動詞」と「空間名詞」との関係＞—中国語の視点から— 方 美麗
ことば遊びは何を伝えるか？
—ヤーコブソンの＜詩的機能＞とグライスの会話理論を媒介として— 滝浦 真人
明治期学術漢語の一般化の過程—『哲学字彙』と各種メディアの語彙表との対照— 真田 治子
話者交替における発話の重なり—母語場面と接触場面の会話について— 木暮 律子
『国語年鑑』に見る分野別文献数の動向—1985年～2000年の雑誌掲載文献— 斎藤 達哉・新野 直哉
メディアにおけるジェンダーイデオロギーの再構築と維持 大原 由美子
世界の言語研究所（11）科学研究最高審議会 スペイン語研究所 上田 博人

『日本語科学』投稿規定・執筆要領
(2002年10月現在)

1. 目的

本誌は、国立国語研究所における研究、ならびに国立国語研究所の研究活動と関連を有する研究の成果を公表することを通じて、広汎な日本語研究の発展に寄与しようとするものである。

2. 発行の時期

本誌は年2回(4月, 10月)発行する。(投稿の受付は随時)

3. 投稿資格

上記の目的に合致する内容の原稿であれば、投稿資格は問わない。

4. 原稿の内容と種類, 分量

投稿原稿は未刊行のものに限る。なお、原則として、対象とする時代は明治中期以降とする。投稿原稿の種類と分量(タイトル, 氏名, キーワード, 要旨, 概要を含む)は以下のとおり。

研究論文: オリジナルな知見の提供を含む学術論文。(20ページ程度)

調査報告: 調査結果の記述を主とする報告。(20ページ程度)

研究ノート: 問題提起, 事例報告, 中間報告などの小論文。(10ページ程度)

各投稿原稿は、CD-ROMの形でデータやプログラム等を添付することができる。

この他、所内外の研究者に**展望論文**(研究動向, 現時点での課題, 将来の展望などについて論じた論文, 20ページ程度)、**書評論文**(20ページ程度)の執筆を依頼することがある。

5. 原稿の書式

- 1) 原稿は日本語または英語で執筆する。ただし、例文等において中国漢字(簡体字・繁体字)、ハングル、キリル文字、ギリシャ文字を用いることは可(それ以外の文字はローマ字化)。
- 2) 原稿はA4判横書き、43字×36行で作成する。(編集委員会が認めた場合にかぎり縦書きも可。A4判縦書き、30字×21行×2段。)英文の場合はマージン上下2.5cm、左右2cm(フォント12ポイント、1.5スペース)を目安に原稿を作成する。原稿はワープロを使用してできるだけ刷り上がり時のイメージに近い形で作成することが望ましい。
- 3) 研究論文及び調査報告には、**キーワード**(5つ以内)、**要旨**(問題と結論の要約, 10行程度)、**概要**(議論全体の概要, 英文は250語以内, 和文は20行以内)をつける。研究ノートには要旨とキーワードのみをつける。和文論文の場合、要旨・キーワードは日本語、概要は英語を用いる(概要には英語のキーワードもつける)。英文論文の場合、要旨・キーワードは英語、概要は日本語を用いる(概要には日本語のキーワードもつける)。英文のネイティブ・チェックは執筆者の責任においておこなう。
- 4) 注と文献は本文の後にまとめて示す。文献一覧の書式は以下のとおり。
著者名(発表年)「論文タイトル」『書名/雑誌名』巻号(雑誌の場合)ページ 発行所
例: 井上 優・生越直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」『日本語科学』1, 37-52, 国書刊行会
宮島 達夫(1972)『国立国語研究所報告43 動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

Bolinger, Dwight (1978) Yes-no questions are not alternative questions. H. Hiz (ed) *Questions*. 87-105. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.

Hudson, Richard (1975) The meaning of questions. *Language* 51. 1-31.

- 5) 付属CD-ROMにデータ等を添付する場合は、容量やデータの形式等について、あらかじめ編集委員会に確認をとってから投稿する。

6. 査読

研究論文、調査報告、研究ノートは、編集委員会が依頼した2名の査読者が査読要領にもとづき審査する。編集委員会は、査読結果にもとづいて論文の採否を決定する。著者の氏名は査読者に公開せず、査読者の氏名も著者に公開しない。査読者と著者との連絡（査読者から著者への照会や修正指示、著者から査読者への回答など）はすべて編集委員会を介しておこなう。

7. 投稿の手続き

投稿原稿は随時受けつける。投稿に際しては、「著者の氏名／所属／連絡先（共著の場合は代表者の連絡先）／原稿の種類（研究論文、調査報告、研究ノートの別）」を明記の上、原稿一式を編集委員会に送付する。投稿原稿は原則として返却しない。

8. 採録決定後の修正

採録決定後、体裁や書式について編集委員会から著者に修正を求める（あるいは編集委員会の判断で書式の細部を変更する）ことがある。査読者及び編集委員会から指示があった箇所を除き、採録決定後の改稿や修正は認めない。

9. 著作権

- 1) 図版の転載など著作権にかかわることがらは、投稿の際に編集委員会まで知らせること。
- 2) 掲載された論文等の著作権（著作権法第27条、28条を含む）は国立国語研究所に帰属する。

投稿原稿は、下記編集委員会まで郵送のこと。

問い合わせ先、文書・FAX または電子メールで編集委員会まで。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会

FAX 03-3906-3530（共用につき『日本語科学』編集委員会宛明記のこと）

E-mail kagaku@kokken.go.jp

URL <http://www.kokken.go.jp/public/kagaku.html>

Instructions for Submitting Manuscripts to *Japanese Linguistics*

1. Purpose of the Journal

The purpose of this journal is to contribute to the development of a variety of different fields in the study of Japanese. To this end, it publishes the results of research done at The National Institute for Japanese Language (formerly The National Language Research Institute), as well as research conducted elsewhere that is deemed relevant to the interests of the Institute.

2. Time of Publication

The journal is published twice a year in April and October. Manuscripts can be submitted anytime and are processed throughout the year.

3. Qualifications for Submission

No special qualifications are required of authors, but all manuscripts must conform to the goals of the journal.

4. Content, Categories and Length of Manuscripts

All manuscripts must be previously unpublished. As a rule, their focus should be on the time period after mid-Meiji. The categories and approximate lengths of manuscripts (including title, name, keywords, abstract, and summary) are as follows:

- 1) **Articles:** Research papers presenting original ideas (about 20 pages).
- 2) **Reports:** Descriptive reports of research, surveys and questionnaires (about 20 pages).
- 3) **Notes:** Short papers that raise questions, case studies, and interim reports of ongoing research (about 10 pages).

Manuscripts may also be accompanied by a CD-ROM of data and programs that will supplement the journal.

The journal may also ask researchers outside the Institute to write prospect papers (i.e., papers on trends in research, current research issues, or future research prospects) (about 20 pages), or book reviews (about 20 pages).

5. Style

- 1) Manuscripts should be written in Japanese or English. Chinese characters (simplified or traditional), Hangul, Cyrillic and Greek characters or letters can also be used in examples. All other orthographic symbols should be transcribed in the Latin alphabet.
- 2) Japanese manuscripts should be submitted in horizontal format with 43 characters x 36 lines on A4 (or 8.5" x 11") paper. (Manuscripts can be submitted in vertical format only with the approval of the editorial committee. Such manuscripts should be prepared with 30 characters x 21 lines in two sections). English manuscripts should be prepared on A4 (or 8.5" x 11") paper and typed on one side only with 2 cm margins at the top and bottom and 2.5 cm margins on the left and right. 12 pt. typeface should be used with line

spacing set at 1.5 lines.

3) All manuscripts should have Japanese and English titles. **Articles** and **Reports** should contain the following elements:

Japanese articles and reports:

- a) Keywords in Japanese (up to 5 words) and English equivalents
- b) Abstract in Japanese (about 10 lines) providing a statement of the problem and solution
- c) Text body
- d) Summary in English of the overall argument (about 250 words)

English articles and reports:

- a) Keywords in English (up to 5 words) and Japanese equivalents
- b) Abstract in English (about 10 lines) providing a statement of the problem and solution
- c) Text body
- d) Summary in Japanese of the overall argument (about 20 lines)

Notes should contain the following elements:

- a) Keywords (up to 5 words) in the language of the text
- b) Abstract in the language of the text (about 10 lines) providing a statement of the problem and solution
- c) Text body

For all manuscripts, it is the responsibility of the contributor to have the Japanese or English portion of his/her manuscript checked by an educated native speaker of the language.

4) Notes and references should be provided at the end of the manuscript. All works referred to should be listed as in the following examples:

井上優・生越直樹 (1997) 「過去形の使用に関わる語用論的要因 - 日本語と朝鮮語の場合 -」
『日本語科学』 1, 37-52, 国書刊行会

宮島達夫 (1972) 『国立国語研究所報告43 動詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版

Bolinger, Dwight (1978) Yes-no questions are not alternative questions. H. Hiz (ed.)
Questions. 87-105. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.

Hudson, Richard (1975) The meaning of questions. *Language* 51. 1-31.

5) Contributors wishing to submit material for inclusion in a supplementary CD-ROM should contact the editorial committee to obtain their consent regarding the format and file-size.

6. Review Procedures

Manuscripts will be read anonymously by two referees appointed by the editorial committee; all manuscripts will be reviewed according to the journal's guidelines. The editorial committee will determine whether a manuscript is to be published, based upon the results of the referees' reports. All contact between referees and authors (regarding referees' questions, comments and suggestions and the author's response) will be carried

out via the editorial committee.

7. Procedures for Manuscript Submission

Manuscripts are accepted and processed at any time. All manuscripts sent to the editorial committee should be accompanied by an information sheet that includes: 1) author's name, 2) affiliation, 3) address where the author can be reached, and 4) category of manuscript (article, report or notes). As a rule, manuscripts will not be returned to authors.

8. Corrections and Revisions of Manuscripts

After the editorial committee makes a decision to publish a manuscript, they may request that the author make changes to the style and format. The committee may also make minor format changes at its discretion. Once the decision to publish a manuscript is made, the author will not be allowed to make any further changes to his/her manuscript, except where revisions are requested by referees and the editorial committee.

9. Copyright

Authors are responsible for obtaining written consent from research subjects, as well as permission to use any copyrighted material or databases as a source in their manuscripts. The copyright for all papers published in the journal belongs to The National Institute for Japanese Language (according to the Copyright Law of Japan, including Articles 27 and 28).

Manuscripts should be submitted to:

Editorial Committee, Japanese Linguistics
The National Institute for Japanese Language
3-9-14 Nishigaoka, Kita-ku, Tokyo 115-8620 JAPAN

For further information, contact the editorial committee at the above address or send a fax or e-mail to:

FAX: 03-3906-3530

E-mail: kagaku@kokken.go.jp

国際シンポジウム開催のお知らせ

日 時：2003年 2月 1日(土) 10:00～18:00

場 所：国立国語研究所

テーマ：「環太平洋地域における日本語の地位」(仮称)

東南アジアを始め環太平洋地域から研究者を招き、日本語の国際的地位とくに日本語の使用状況、日本語に対する価値観などを、日本語教育、社会言語学、さらには社会学の視点も踏まえて討議したい。

招聘研究者：Yotsukura Lindsay (米メリーランド大学)、池田俊一 (オーストラリア国立大学)、小林路義 (鈴鹿国際大学)、石井健一 (筑波大学) ほか数名

詳細は後日、国語研究所ホームページや雑誌等の研究会案内などでお知らせします。

なお、今年度はこの他に、昨年に引きつづき「日本語教師教育を考えるⅡ 教師評価」(非公開)を開催する予定です。

査読者一覧 (第9～12号)

(五十音順、敬称略)

安部 清哉, 阿部 洋子, 石井 正彦, 石崎 雅人, 伊藤 雅光, 井上 文子, 井上 優, 宇佐美まゆみ, 宇佐美 洋, 江川 清, 大鹿 薫久, 大島 資生, 大西 拓一郎, 岡本 能里子, 荻野綱男, 生越 直樹, 尾崎 喜光, 小野 正弘, 柏野 和佳子, 加藤 久雄, 金田 智子, 蒲谷 宏, 川口 義一, 菊池 康人, 金水 敏, 工藤 浩, 工藤 真由美, 窪園 晴夫, 熊谷 智子, 小林 隆, 小松 寿雄, 坂原 茂, 坂元 慶行, 佐久間 まゆみ, 佐竹 秀雄, 杉本 明子, 杉本 武, 高梨信博, 高橋 太郎, 高橋 弥守彦, 高山 倫明, 田中 章夫, 田中 牧郎, 丹保 健一, 陳 力衛, 辻 大介, 土屋 信一, 當山 日出夫, 友定 賢治, 長嶋 善郎, 成田 徹男, 丹羽 哲也, 任 榮哲, 野田 春美, 野村 眞木夫, 蓮沼 昭子, 長谷川 信子, 半沢 幹一, 姫野 昌子, 藤井 聖子, 藤田 保幸, 古別府 ひづる, 星野 和子, 堀口 純子, 村木 新次郎, 森田 良行, 森山卓郎, 益岡 隆志, 松井 利彦, 丸山 直子, 三井 はるみ, 三宅 和子, 三宅 知宏, 最上 勝也, 森 雄一, 矢澤 真人, 山口 堯二, 山崎 誠, 矢田部 修一, 山田 進, 山中 信彦, 湯浅茂雄, 横山 詔一

編集後記

◇10月に編集委員の任期満了とともなう交替が行われた。任期満了となったのは、以下の6名である。長年の労をねぎらいたい。なお、本号の編集は実質的にはこの6名も含めた旧委員で行われたものである。

大島資生（東京大学留学生センター）、山田進（聖心女子大学）（所外委員）

熊谷智子、横山詔一、鈴木美都代、塚田実知代（所内委員）

◇新委員となったのは、以下の6名である。

青山文啓（桜美林大学）、安部清哉（フェリス学院大学）（所外委員）

小椋秀樹、小磯花絵、齋藤達哉、福永由佳（所内委員）

青山、安部両委員は言語研究者として現在もっとも脂が乗っている時期で、学界での活躍ぶりは周知のとおりである。所内委員は若手所員に積極的に委嘱した。ヤングパワーの今後の活躍に期待されたい。

◇本号から、英文版の投稿規定と執筆要領とを掲載することにした。近年は、インターネットの普及により海外からの問い合わせも増えてきた。英文の論文もこれまでに数本掲載されており、今後も大いに歓迎したい。

◇本号は、研究論文7本という、質量ともに大変に充実した号となった。調査報告やノートを除いた研究論文の数だけを見ると、これまでの最高が5本なので、本号はそれよりも2本うまわったことになる。これまでも投稿論文数が増加傾向にあることは何度もお知らせしたが、その傾向は現在も続いており、編集委員会としてはうれしかぎりである。今後とも、各方面からできるだけ多くの投稿を期待したい。

◇7本の掲載論文のうち、6本が文法で、しかもそのうちの3本が副詞の問題で占められている。これが偶然によるものか、現在の研究動向が反映されているのかは、にわかには判断しかねる。この事実を念頭においたうえで、今後の動向を見守っていきたいと思う。

◇李論文では、用例の多くがインターネットのホームページからの引用となっている。インターネット上からの引用については、まだ事例が少ないこともあり、取り扱いに関する標準的なルールが確立していない。その問題点を整理すると、主に二つの問題にわかれる。一つは、「引用の仕方の問題」で、もう一つは、「著作権上の問題」である。李論文では、ホームページのアドレスだけが所在情報としてあげられているが、テーマとのかかわりの上では、それでも問題はないと判断した。また、著作権の点について、弁理士に相談したところ、著作権者の最低限の情報としてホームページのアドレスがあげていれば問題はないという回答ももらっている。以上のような議論や経過から、李論文はそのままの形で掲載することにした。ここで、これ以上この問題に触れている余裕はないが、学界全体として何らかのルールを確立することは、緊急の課題ではなからうか。

◇本号の英文校訂は国立国語研究所招聘研究員のカネギ・ルース氏にお願いした。

(2002.10.10 伊藤雅光)

編集委員

伊藤 雅光 (委員長, 国立国語研究所)
大島 資生 (東京大学留学生センター)
尾崎 喜光 (国立国語研究所)
加藤 安彦 (国立国語研究所)
熊谷 智子 (国立国語研究所)
杉本 明子 (国立国語研究所)
鈴木 美都代 (国立国語研究所)
塚田 実知代 (国立国語研究所)
山田 進 (聖心女子大学)
横山 詔一 (国立国語研究所)

『日本語科学』12

2002年10月

国立国語研究所

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
TEL.03-3900-3111 (代表)

[本書の市販品発行所]

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL. 03-5970-7421 FAX 03-5970-7427